私たち神のまま子は

生野幸吉

新潮社版

私たち神のまま子は

生野幸吉

新潮社版

生野幸吉

1924年　東京に生れる
1951年　東京大学文学部卒業
1966年　『生野幸吉詩集』で第9回高村光太郎賞受賞
他に『詩集　飢火』、『抒情と造型』がある。

私たち神のまま子は

昭和四十五年十一月十日　印刷
昭和四十五年十一月十五日　発行

著者　生野幸吉

発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七十一
電話　東京（〇三）二六〇－一一一一
振替　東京八〇八

印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　神田加藤製本所

定価七〇〇円

落丁・乱丁本はお取替えします

© Kokichi Shono 1970 Printed in Japan

目次

私たち神のまま子は……5
きさらぎ手記……145

装幀　木内克

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

私たち神のまま子は

冬の夜
夏の日
百歳ののち
其の室に帰せん

詩経唐風

私たち神のまま子は

1

ひきがえるのような、と父親に嘲られたわたしの顔も痩せてしまつた。その蒼ざめて険しい顔にゆみ子は滑らかなおしろいを塗り、ルージュでくちびるを描く。それはスキュラと呼ばれるようになつたいじけた雌猫を手なずけようとする彼女の興味と同じものなのだ。「ほら、なかなか美女」と、ゆみ子はわたしを三面鏡の前に拉致したが、ひと間きりの部屋にさしこむ晩い夏の光をあびて、鏡の顔は白い仮面のように見えた。女形を昼に見るときの疑わしいデカダンスがそのなすくられたおしろいから匂い立ち、女のようにかたどられたくちびるに露呈されていた。そしてきみわるい白漆喰のあいだから疲れた眼が見つめていた。

「充(みつる)はワクドみたいだな」——あの日陰鬱にうずくまつていた息子に父は嘲弄の声をあびせた。わたしは同級の少年が好きになつて悩んでいた。しかし言いようのない悩ましさを

包む顔は意志に逆らうように醜くふとり、皮膚はついさきごろまでの少女めいた肌の記憶を蝕むようにふきでもので荒されていた。

ワクドみたいなという批評は、晩春の夕空を見ている頬の膨れた少年の畳にしやがんだ姿を鏡にいきなり映したようであつた。ワクドというのは父の田舎でひきがえるを指す方言なのだ。

弟は「母」の美貌を鼻すじや肌にうけついでいる。ひきがえるに似た少年は、自分の亡くなつた母をはずかしめる子なのだと、やり場のない無念をおぼえた。

ワクドという仇名を父は二度、三度と使つた。

それと同年のころか、髪をおかつぱにしていたのが確かな記憶だとすれば、小学校を終らないうちだつたのか、わたしは鏡台の前に坐り、甘いやるせない気持で「母」の匂いに寄り添うようにしていた。

水銀箔の反射の遠くに表庭の青桐の幹が映つていた。鼻唇溝の深い、しかも下唇のふくらみの豊かな「母」の口もとをその鏡のなかにわたしは見守つていた。そして「ね、おかあさま、ぼくおかあさまに似ていない？」と、おもねるように思いきつてたずねた。

「充ちやん」と言つて、その唇は黙つた。餌をもらう犬のようにわたしはどんな芸でもして見せたかつた。

「母」の唇は不意に誘惑の形にひらき、やさしい声で言つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「充ちやんはね、堕されるはずの子でした」
どうして、とたずねようとするわたしに「母」は押しかぶせて言つた。
「おとうさまから伺つたのですよ」
「堕す」ということばが、すぐにはつきりとのみこめたわけはないものの、早熟な少年は新聞に報道されたばかりの人気女優の堕胎事件を読んでいたし、連行される女の写真の、顔を伏せてはいるが形のいい姿を忘れなかつた。おそらくそれは大人の世界を覗くためらいと、義憤のような感情に支えられた体験であつた。
なぜ「母」が継子を傷つけようとしたのか。彼の罪はといえば、「母」に密着して甘え、その唇に魅せられたということにすぎない。しかし幼なかつたわたしは、自分のいのちが胎内ですでに否定されたかもしれないという疑念と、それにまつわるスキャンダラスな犯罪の匂いとにおびえたようである。
そんな記憶が残つてはいるものの、先妻の子をはぐくむのに配慮の欠けるところはなかつた。わたしの母親の写真は隠され、わたしという子の違和感を興隆する家庭の活気づいた雰囲気に溶かしこもうとする努力は一貫したものであつた。それがあまりに一貫しているのがわたしにはもどかしかつたが、一瞥して裁ちおろしの白布と思える幕を張る努力は意外な縫い目からほころび、真相への盗み視をゆるしてしまう。しかもその針のメドほどの隙間からは隠されていた母体が垣間見えるかもしれないのだ。

わたしが短兵急にゆみ子を攻め落していつしよになつたのは、少女じみたその姿の明るさとやさしさに、はたちそこそこで亡くなつた母を思い描いたのかもしれなかつた。年がちがいすぎる、と君は言うのか？　わたしにとつて女はみな隠された母体だと言つていいのだ。

掘りつくした鉱床のような感情にカンテラが灯る——いや消えていたカンテラに偶然が火を点じたと言うべきだろう。仮縫いの服をためし着するようにわたしたちは新しい生活を纒つたが、やがてやつてきた梅雨は、ほころびそうな服の縫い目を寒冷な青いかがやきによつて見えぬようにした。

いじわるな手が、あるいは迂濶な手が、マチ針を留めたまま忘れたかどうか、——そんな懸念も梅雨という青く閉じきられた密室のなかでは兆さなかつた。雨滴はわたしが急ぎ建てた家の金属屋根や、いつぽんきりの杏や裸の地面に、それぞれにちがつたふうに触れ、ひとつの感情をつくつていたし、ものかげには裂かれても閉じるつぼみのように若い肉体がいた。わたしは雨どいの口が捩れた水を吐くのをみつめ、ういういしい花弁と触手を持つ女を守る箱として、そのあたらしい家はあつた。

部屋にこもる薄暗さが砂利道につづいている。しかし八月末の暁の冷たさはしんそこから信じられるものではなかつた。わたしたちがその坂を昇りきり、南へ向う道を低丘陵地

の裾をくだるようにゆくと、洗いざらしの袋のような服を着た中年の女が立ち、涎でよごれた赤ん坊を抱えている。肥つた顔に垂れさがらんばかりのおおきな下唇が横着なふうに歪んでいて、斜かいに女はわたしたちを睨みつけ、露地から出てきた小狐のような犬も薄あかりのなかで猜疑深い視線を走らせた。

何年か前までそのあたりが湧き水で湿つた窪地だつたことを、わたしたちはようやくこのごろになつて知つたのだが、近在でもつとも地価の低いその界隈に、羽目板むきだしの、四目垣でどうやら囲いされた剏一の家が立ちならび、やがて貧しい人たちが住みついたのだ。

通りがかつた少女が電柱のスイッチの紐を引き、淡く光るはだかの電球を消して去り、やがて眺めがひらかれ、左の方の地平に畳まつている銅いろの鈍い雲のなかから太陽が昇つてくる。いきなり全貌をあらわす赤くふくらみきつたその団円、その輪郭のなかで溶けたぎる地平すれすれの一つの天体の、ほとんど殺戮的な怒りは、やがてあらわにわたしたちをおびやかすものであつた。

上水にかかつた橋のむこうでゆみ子はつゆくさに似て型の大きいムラサキツユクサを摘み、そのつぼみは虔ましい鈴の恰好をして乾いていた。

丘の斜面は茶の生垣にふちどられた畑であつて、雉子鳩が重いからだをつばさで支えるようにしてその垣の蔭から飛び立ち、神明社の杉木立に消えた。

わたしはゆみ子のむきだしの肩を抱こうとしたが、朝のひかりはもうあからさまで、竹籔や農家の藁屋根のみえる景色の一端に奇蹟は起りそうにもなかつた。

半面の蔭つた月は、疲弊したひとびとにかえつて渇きを唆る過熟したひかりの幻像にすぎない。闇になつても衰えようとしない暑さのなかでわたしは虚脱感におそわれる。それはたとえば、はなればなれに忘れられていたゆみ子の乳あてと、その下にはさむ乳の形のゴムの、あの無感情だ。女という肉のすべてが、その贋ものの、つかみどころのない人工乳房ででもあるかのような。——

淡紅色の煙のようなトリコットがゆみ子のからだをゆるやかに掩つている。

（一つの日、一つの年を、ひとはこうして流れの底に葬むる）とわたしは思う。（たとえば父が望んでいた郷党の名士としての彼の伝記のように。そのとうとう書かれなかつた頁の、ある一つの空欄に亡くなつた母がいる。そして胎垢と血にまみれたひとりの子どもが）

（寝るということ、——女のからだにはいつてゆくことはなんという行為だろう。女は女そのものから遠のくし、その刹那に愛は消えてしまう。あのシャークスキンを剝がれたからだもゆみ子のそれも、母のそれも継母のそれも、闇のなかで一つの肉にすぎなくなる。……）

（ゆみ子はいつか指をねぶつてやまぬ子猫のように、わたしの舌を吸つて吸つて狂気のようになつた。こんなあたし、いやでしよう、と彼女は言つた。そしてそれきりそのはげしい口づけをくりかえさなかつた。……）

にぎりしめると指から擦り抜けそうなその生地の下で十歳あまり年若い女のからだは一種の犠のように思われる。迎えようとして必死になつてうごき、裂かれ、合わせられ、くつがえされるそのふともも や臀を、奇矯な吃りのような動作と暴虐な硬さが犯してゆく。

――まして寝不足という重荷をのこしたあの早暁の散歩ののち、太陽はすぐさま万物をあらあらしくひからびさせ、扁平な逃げようのない一日を命じたのだ。

ひかりの輪を重ねあつていた天井の三つわかれの灯を消すと、暗やみは暑さの微粒子で充ちるかのようだ。裸の背が汗ばみ、そこに当る小さな蛾らしいものをわたしは捕えた。壁の側燈を明らせるとき、わたしの手は壁に斜めに流れる大きな影となつた。

（銀の砂を散らしたラメの硬さに包まれた女と並んで、わたしは神前に進んだが、――あのときのゆみ子の平静なおとなびた横顔は、日常というものの自若とした始まりにすぎないのではなかつたか。――そしてあの薄べりの上の儀式は、あらためてわたしを小学校の講堂へつれもどして、訓育や血縁の網に捕えようとする貧相な呪術に似ていた。

煉瓦と凝灰岩が依怙地に膠着されたその建物は、大正の末に造られてから象徴的な『帝国』の名を担いつづけている。……

あわただしい結婚を妨げようとする執拗な努力のあげくの挙式、そしてわたしとゆみ子の家柄を釣りあわせる、つまりゆみ子の家格を『帝国』並に引き上げようとする「邸」のひとびとの底意がわたしにはわかつていた。

しかし結局はわたしは父の所有する小さな地面を借りねばならず、場末の大学の講師に不似合いな条件を呑まざるをえなかつた)

(あるいはまた、かれらを憎むこのわたしにしても「邸」の虚栄から逃げおおせることはできないのかもしれない。わたしを生み、わたしのいのちをとりとめて死んだという母親の顔をわたしは知らないのだが、もしもその亡くなつた女の手で育てられたのであつたら)

みぞおちから臍へ這うわたしの手は、父親に似ていかめしく、指頭が固い。冷たい化繊の夏蒲団を剝がれたゆみ子は、はばのない肩を首すじに寄せるように円くすくめ、「いや」とささやいた。

淡紅色のねまきのたて一列のボタンがはずされ、胸もとから腹がほとんど幼くみえる。その乳くびがにわかに思い立つようにつのぐむのに、「熱があつてつらいの」とちぐはぐにゆみ子は言い、眉の根にかすかに皺がはいる真剣な眼つきだつた。

鉄を噛んで停る車輪の悲鳴が終発に近い時刻のいらだたしいやり場のなさに変つているが、そのたやすく制動のかかる新しい型のブレーキは、日本ではない闇にきしんだそれとそつくりなのだ。わたしは黙つてあかりを消し、——いやよ、きようは。熱があるのよ、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.